

知 恩 傳 攷

井 川 定 慶

一、上人の別傳

法然上人の傳記として最も古きものは聖覺の撰にかゝる上人傳（十六門記）である。即ち上人滅後十五年（安貞元年極月）に出來てゐる。また常隨の弟子であつた勢觀房源智の淨土隨聞記の中にも上人の行狀を輯めてはゐるが法語が主となつて居り特に上人傳といふ程のものではない。

然るに上人滅後廿五年（嘉禎三年正月廿五日）に耽空が傳法繪流通（現今の本朝祖師傳記繪詞——筑後善導寺所藏——と呼びなされてゐるものの原本）四卷をつくつてゐる。繪卷物としての上人傳の最初である。それより八十餘年を経て徳治の頃功德院舜昌が法然上人行狀繪圖四十八卷といふ浩翰なものを勅命を奉じて大成したことになる。

また本願寺の覺如は祖師親鸞聖人が法然上人の弟子であつたことを主張する爲めに「拾遺古徳傳」を編輯して親鸞の加つた法然上人繪傳を更に世に出したわけである。

上述の法然上人行狀繪圖（勅修御傳）四十八卷及び拾遺古徳傳九卷は共に繪卷物としての價值も高く夙に國寶に

指定され随つて世間によく知れ渡つてゐる。

尙ほかなり古い時代につくられた上人別傳に「源空聖人私日記」といふ二百五十行ばかりの簡にして要を得た單篇があつて古くから西方指南鈔に輯録されて居るし、近年に至つて醍醐から發見された法然傳（所謂醍醐本）にも收つてゐた。

此の外に上人の法孫に當る敬西房信瑞の上人傳一卷があつた筈である。此の一卷傳は「上人本傳」と稱して諸方に引用されてゐ乍ら其の原本はもとより原型をそなへた寫本さへも佚してゐる。此の書は勅傳卷廿六によると嘉禎二年正月に元祖上人を追慕のためにつくり其後廿六年を経て弘長三年著者信瑞が鎌倉に下り北條時頼に謁した際に一本を獻じたといふことになつてゐる。ところで同じ信瑞が撰述した「明義進行集」が先年黑板博士によつて河内國天野山金剛寺で發見されたのであるが、惜しいかな三卷の上を缺き中下の二卷のみ存してゐた。發見間もなき大正の末年大谷大學教授橋川正氏の厚意によつて逸早く拜見したところ中卷の初めから筆勢が改まつて上人の弟子を順次に擧げ其の傳記とその念佛義とを記してゐる。惟ふに上卷には法然上人の傳記とその御法語をまとめて法然上人の念佛義を明かにしてゐたのであらう。こゝにも信瑞の上人別傳が缺けてゐて惜しいことである。然し堺旭蓮社澄圓の禪淨對論の用意のために書き上げられた獅子伏象論を讀むうち「上人傳に云う」として輯録する小傳があるを知る。「滅後廿餘年云々」の文言などより類推して此れが上述の信瑞撰述にかゝる上人傳か或はその抄録ものであるらしいと私はねらひをつけるに至つた。

二、新出の上人傳

また去る大正十三年の晩秋に江州のさる寺から知恩院に納まつた「法然聖人繪」殘缺一卷がある。此れに關する研究の結果は京都大學文學部史學研究會發行「史林」第十卷第三號に、「新出の法然上人繪傳」の題で論述し學界並に文部省に認められ此の繪卷は早速と國寶に指定されたのであるが、殘缺なる點から此の繪卷の同類を探索中、幸ひにも内藤湖南博士や澤村專太郎先生の御力添を得て神戸市川崎武之助氏祕藏の「法然上人繪傳」を特別觀覽する機會を恵まれたのであるが、開卷するや忽ち狂喜したのである。即ち詞書、畫風、奥署が知恩院の新出「法然聖人繪」に合致してゐて私は探してゐた我が子に邂逅した感がしたのであつた。其の内容はやがて同じく「史林」第十二卷第四號に「再び法然聖人繪に就て」として發表した。此の一連の法然聖人繪の奥には「釋弘願」の署名があるところから爾來「弘願本」法然上人傳と通稱されて今では勅傳、古德傳と並び重視せられるに至つた。

上人別傳としては以上の外既に周知のものに九卷傳、十卷傳、祕傳抄、琳阿本、増上寺本（殘缺）を擧げうるであらう。

ところで國華（大正十三年五月と七月號）誌上に藤懸靜也博士が「法然上人繪傳」を論考されその文中に越後西脇濟三郎氏所藏の上人繪傳を從來知られてゐる上人傳の内容に合致せない別本で知恩院の四十八卷傳や増上寺殘缺本に優るとも劣らぬ逸品と紹介せられてゐる。然し其の繪詞を同博士の厚意によりて手許によせて攷究したところ拾遺古德傳卷第八卷二段より同卷末に至る部分と全然一致するものであつて決して新奇の別傳ではなかつたのである。私はそこで新奇なものと斷案するには充分の研究と塾慮とを要するものだと一層痛感したことであつた。

三、知恩傳の著者

そこで知恩傳が新出の法然傳であると聞かされても容易に賛同出来なかつた。實は前述の新出法然聖人繪（弘願本）を發表するにも隨分と慎重を期したものである。そして弘願本とても全然新奇なものでなく、就空の傳法繪流通から派生したもので古德傳と同格の上人別傳であることをあらゆる例證を擧げて確めた上で前述の「史林」に紹介しておいたのである。

それにしても「知恩傳」は既に名を知られ乍ら原本を佚してゐた部類に屬する上人傳である。それについては元祿の頃知恩院山内入信院在住の學僧義山によつて編輯せられた勅修御傳翼賛の卷第一に上人行狀別傳の種類を列擧し「知恩傳二卷」の名を記してゐるが、その著者名を缺く。眞宗教典志第三にも知恩傳の名のみ出づ。然るに昭和五年三月大正大學發行の「淨土學」第一輯に高瀬承嚴氏が「望西樓撰述の法然上人傳に就て」といふ題で此の久しく消息を絶つてゐた「知恩傳」二卷の入手機縁から其の内容一斑の紹介につとめ其の最後に

「是等は思ふに著者（了惠）が上人傳を作らむとしてプランを立て語灯錄の編纂其他諸種の著述中、折に觸れて徐々に記事を進めむとして終に成らざりしものの如く觀ぜらる。」

と結んでゐる。而して其翌六年五月佛教專門學校發行「摩訶衍第十卷（望西樓特輯號）」に其の知恩傳の全文が掲載されたところ其の卷尾に

右知恩傳二卷以三良照義山公所持本一寫之自校合畢

此本東山大谷入信院庫藏在之

惠山叟

とある。そこで私は早速入信院を尋ね住職橋本堅道氏の厚意で庫藏を探し漸く知恩傳下卷のみを得て高瀬氏祕藏本と對比するに殆んど相似てゐたから未見の上巻も定めし高瀬本と近似するものと察知せられたのである。

さて望西樓了惠は上人四代の法孫で三條派の祖と仰がれる法器であり、上人の遺文集たる和漢の語灯錄十八卷を輯録し更に二祖辨長、三祖良忠の傳記をも撰述した宗門の功勞者である、さればこの人に元祖法然上人の別傳があつても不審ではなからう。そこで此の知恩傳の奥に「先師上人滅之後僅雖_レ歷_二七十餘廻之星霜_一云々、於望西樓抄出之畢」とあつてみれば高瀬氏ならずとも此の知恩傳を了惠撰述と速斷せられるであらうし、摩訶衍の編輯責任者が同調せられるのも一往首肯せられやう。

四、十卷傳と近似

然し了惠の編輯として確かな拾遺漢語灯錄の中には、三昧發得記并夢感聖相記、淨土隨聞記付臨終祥瑞記などがある。前二篇は上人自筆、あとの隨聞記は常隨の勢觀房源智の著となつてゐる。してみると此れら四篇の内容と知恩傳とは共に了惠の筆になつてゐると假定して兩者を對照する時に、お互ひの關連性が極めて薄いことに先づ注意すべきである。

また上人が往生要集を披閱したのは承安四年のこと。上人の母と叔父觀覺得業とが上人を尋ねて上洛せしこと。淨土開宗を安元元年（承安五年）三月十四日と明記せることが如何にも知恩傳の特徴のやうに紹介せられてゐるが、其れらは十卷の法然上人傳（十卷傳）に既に記述することを無視された所論である。

十卷傳と知恩傳との近似せることは右の項目以外に、其の序文に於て十卷傳所載の後序（又云く以降）と合致す

るのみならず兩書の見出しが殆んど順を追ふて同調してゐる。

高瀬氏は知恩傳にいふ「如_三本傳_二」は信瑞の上人一卷傳、「繪詞悉記_レ之」は耽空の傳法繪流通とまことしやかに考證してゐるも信瑞の一卷傳は上掲の如く佚本であるし、耽空の傳法繪流通の詞書にしても果して當嵌まるか甚だ疑問の點の多い單なる憶測にすぎない。

眞宗教典志第三には十卷傳を説明して「作者未詳、西山十卷傳と稱し典實同_二古德傳_一怪異類_二正源名義鈔_一間有_レ似_二舜昌傳_一云」と。

十卷傳はその第六卷に親鸞聖人を傳へてゐるところから見て西山派に傳はる法然上人傳ではあるが、寧ろ眞宗系統のものの手によつて拾遺古德傳を主にしていろ／＼怪異古傳説をとり入れて編輯したものかと思はれる。

而して今の知恩傳は十卷傳より抄録したものか、或は溯つて十卷傳のもとなる法然上人傳より抄録したものであり、抄録者は折しも手近かにあつた「本傳」「繪詞傳」記載の事項を便宜上省略して一往別傳の如き體裁を整へたものかと思はれる。

五、結 語

義山も眞宗教典志の玄智も知恩傳の著者名を明記してはゐない。然るを此の第二次的もしくは第三次的價值の上人傳としての知恩傳を價值づける爲めに望西樓了惠が恰かも撰述したかの如く奥書を付記したものが現存の知恩傳ではあるまいか。而かも其の内容たるや新出の法然上人別傳としてさほど珍重する程のものではないことを更に付記しておかう。（前西山専門學校教授）